



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	指示対象のとらえ方と指示詞の選択意識に関する日韓対照研究(全文の要約)
Author(s)	李,賢淑
Citation	
Issue Date	2015-03-17
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/139034">http://hdl.handle.net/2309/139034</a>
Publisher	
Rights	

本論文では、韓国語母語話者・日本語母語話者・韓国人日本語学習者において、現場指示と非現場指示それぞれの場合で、指示対象のとらえ方と指示詞の選択意識がどのように異なるのかを対照分析するもので、その目的は以下の3点にある。

目的① 現場指示においては、日本語母語話者と韓国語母語話者の対象認識のあり方の異同を明らかにすること、さらに、韓国人日本語学習者は日本語の指示詞をどのように使っているかを調べ、日韓母語話者の使用傾向との異同について考察すること。(第Ⅱ部の3章、4章、5章)

目的② 非現場指示においては、話し手・聞き手・指示対象がどのように場の状況や文脈に関係しているかを文脈への依存度の面から把握し、日韓の指示詞使用意識の相違点を明らかにすること、さらに、韓国人日本語学習者の指示詞選択の実態を把握し、その要因を発話者の心理的要因や主観的な基準などを探ること。(第Ⅲ部の6章、7章)

目的③ 以上の研究成果を総合し、韓国人日本語学習者の各学習レベルに合わせた日本語の指示詞指導の方策試案を考え、日本語教育への実践的フィードバックを検討すること。(第Ⅳ部の8章)

以上の三つの目的について、本論文の各章に沿って、その内容と結果をまとめる。

目的①の達成のため、第Ⅱ部では、現場指示を中心に実態調査や記述調査を行い、日韓母語話者、韓国人日本語学習者の指示対象のとらえ方について検討し、その異同を明らかにし、詳細は次のとおりである。

第Ⅱ部第3章では、現場指示について様々な状況の談話レベルで日韓両言語話者及び韓国人日本語学習者の指示対象の捉え方、その認識のあり方(物理的・心理的遠近感覚)の相違について明らかにすることである。話し手・聞き手・指示対象の状況設定は、現場指示において「融合型」と「対立型」に分けて行い、指示対象を融合型と対立型において、それぞれ「目に見える指示対象」と「目に見えない指示対象」とに分類する。

以上の分類にもとづき、それぞれ仮説を立て、アンケート調査・検証を行った結果、日韓母語話者の物理的・心理的遠近感覚の相違点について以下のことが分かる。

まず、韓国語母語話者は、物理的・心理的な距離感が一定に維持される傾向があるのに対し、日本語母語話者は様々な状況に応じて、物理的・心理的な距離感を相対的に変化させている。

次に、日本語母語話者は「コ」で指し示す範囲が広く、韓国語母語話者は「ア」で指し示す範囲が広いことから、日本語母語話者は指示対象を近くに感じとるが、韓国語母語話者は同じ状況であっても指示対象を遠くに感じることが分かる。

さらに、韓国人日本語学習者の現場指示の選択傾向は、日本語と韓国語の中間に位置しており、韓国語の影響と日本語指示詞の学習の影響とが考えられる。また、学年が上がるにつれて、日本語母語話者の指示詞の選択状況に近づいていく傾向が見られる。しかし、融合型では、韓国人日本語学習者は、「ソ」を日本語母語話者より過剰に選択している。また、対立型の目に見えない指示対象の場合、韓国人日本語学習者には不適切な「ア」の選択が見られる。

第Ⅱ部第4章では、指示対象が現実空間にあるときと仮想空間にあるときとでは、日韓両語で対象認識のあり方がどう違うのかを解明することを目的とする。また、各々の空間で、韓国人日本語学習者がどの指示詞を選択するかについても調査を行う。調査では、テレビ自体をさす(現実空間)ときとテレビの中の登場人物(仮想空間)をさすときとで、また、仮想空間の対象の人物・事物・場所の性質により、指示詞の選択がどう変わるかに

ついて、仮説を立て検証を行い、分析の結果、次のことが分かる。

現実空間の指示対象では、日本語母語話者は、発話現場の物理的な距離に依存しつつも心理的な距離の影響も受けている傾向が見られたが、韓国語母語話者は、発話現場の物理的な距離に強く依存する傾向が見られる。

仮想空間の指示対象では、日本語母語話者は、発話現場の物理的距離や心理的距離の両方が重層的に現れる傾向があるが、韓国語母語話者は、発話現場の距離より心理的距離が優先される傾向がある。仮想空間での指示詞の選択傾向では、日本語母語話者は、仮想空間に自ら身を置き、その世界の当事者として事態を見るという「主観的」把握をする傾向が強いため、全体的に「コ」の選択が高い傾向にある。韓国語母語話者は、話し手が指示しようとする事物の世界の外に身を置いて自分の知覚する事物を見る、つまり「客観的」なスタンスでテレビの中の世界を捉える傾向が強いため、「ア」の選択が圧倒的に高い傾向にある。

韓国人日本語学習者は、学習者の「ソ」の選択傾向が日本語母語話者に近いが、学習者の「コ」・「ア」の選択率は日本語母語話者とは異なり、韓国語母語話者に似る傾向がある。しかし、日本語の「ソ」の使用を過剰に意識している様子が窺え、ことに仮想空間の指示対象を指す場合、日本語母語話者よりも「ソ」の過剰使用が見られる。

第Ⅱ部第5章では、日韓両語の時空間・事物に対する捉え方の違いの相違等々について物理的・心理的的局面を含む考察を行う。特に、現場指示「コ・<sup>イ</sup>」が日韓一方のみで現れる場面について、その根拠を話し手のイマ・ココ意識の在処がどう指示詞選択に反映されるかという面から対照分析を行う。研究方法として、日韓のマンガの場面を分析対象とし、記述分析を行う。指示詞が日韓で非対応の場合を中心に、指示詞が示す対象を「人物」、「場所（空間）」、「モノ」「時間」、「こと」に分類し、考察を行う。その結果、日本語では、話し手自身を取り巻く状況・事態を捉える場合に、「コ」を使用し対象把握を相対的に行う傾向が見られ、韓国語では、目前の対象を捉える場合に、「<sup>イ</sup>」(コ)を使用し、言語的に事態をより一般化・具体化する傾向が見られる。

目的②の達成のため、第Ⅲ部では、非現場指示を中心に記述調査や実態調査を行い、日韓母語話者、韓国人日本語学習者の指示詞の選択意識について検討する。

第Ⅲ部第6章では、話し手・聞き手・指示対象との3者がどのように文脈や状況に関係しているかを文脈依存度の面から考察し、指示詞の使用・非使用を巡る日韓の言語使用意識の相違点を明らかにする。方法論的には、漫画の非現場指示詞が日韓非対応で「ソ」系指示詞が一方のみに現れる場面を中心に、指示詞が示す対象を「人物」「場所（空間）」「モノ」「時間」「こと」に分類し考察を行う。その結果、非現場指示ソ系が日韓の一方のみで現れる例文の文脈依存度について、例文の「人物」や「コト」という対象に着目、話し手・聞き手・指示対象との関係がどうなっているか、どのような文脈状況で指示対象を指示詞で指示するか否かという観点から分析を行い、日韓の文脈依存度の観点からの分析の結果、次のようなことが明らかとなる。

まず、日韓の一方のみにソ系が現れる場合で、日本語のみにソ系が現れる場面では、韓国語で表現しにくい日本語に特徴的な例文 (ex. [人を表す] それ、[否定を表す] そんな、[不定の場所を表す] その先、など) が多いが、韓国語のみにコ(ソ)系が現れる場面では、日本語でも指示詞を用いて表現できるが、あえて指示詞を入れずに済む表現が多い。

次に、日韓の一方のみにソ系が現れる場合で、文脈依存度との関係を軸に、例文の指示対象を「人物」と「こ

と」に分けて分析し、次のような特徴が明らかとなる。

指示対象が人物の場面では、日韓のどちらかが高文脈言語であるとは言い切れず、状況や場面によって各々の文脈依存度が異なることがわかる。また、指示対象がコトの場面では、日本語のほうが韓国語よりやや高文脈言語であることがわかる。

第Ⅲ部第7章では、韓国人日本語学習者の非現場指示「ソ」と「ア」の不適切な選択の原因について、発話者に関わる物理的・心理的な遠近感、現場指示からの類推による時間・距離の遠近感、肯定的・否定的ニュアンスによる発話の態度・姿勢という三つの観点から仮説を立て、学習者の指示詞の選択要因を検証する。韓国人日本語学習者は、非現場指示の未習者と既習者に分類し、仮説検証のアンケート調査を行い、さらに、発話の肯定的・否定的ニュアンスの補足調査するため追加調査もを行い、以下のことが明らかとなる。

未習者・既習者ともに、「ア」（韓国語の非現場指示に存在しない用法）を「ソ」にする不適切な選択が多い。既習者は未習者より学習が進んでおり、話し手・聞き手の情報共有に基づいて指示詞を選択しているが、「ソ」と「ア」の用法を反対に理解し、不適切な使用が多い。これに対し、非現場指示未習者は、聞き手・話し手の情報共有の有無により指示詞「ソ」と「ア」を使い分ける学習を未だしていないにも拘わらず、韓国語の非現場指示で使われない「ア」が使用され、独自の基準を立て指示詞を選択していることが分かる。それを三つの仮説から検討した結果、具体的に次の三点が明らかとなる。1) 心理的に自分と関わりの強い人物や事柄には「ア」が選択され、自分と関わりの弱い人物や事柄に対しては「ソ」が選択されやすい傾向にある。2) 未習者は非現場指示用法を現場指示から類推しているため、遠い過去の時間を指す場合には、「ア」が選択されやすく、不確実な未来、近接する過去や未来の時間を指す場合には「ソ」が選択されやすいことが分かる。3) 否定的ニュアンスの対象には「ア」が、肯定的ニュアンスの対象には「ソ」が選択されやすいことが分かる。

目的③の達成のため、第Ⅳ部第8章では、研究成果を日本語指導に適用し、学習レベル別の指示詞の指導案を試案として提案する。

第Ⅳ部第8章では、日本語教科書をめぐる日本語指示詞指導の現況についての研究を踏まえて、教育現場における指示詞指導の実態や問題点を述べる。その後、第Ⅱ部と第Ⅲ部で明らかにした日韓の指示詞選択の相違や日本語学習者の困難点などに基づき、日本語の指示詞指導の方策試案を学習レベル別に検討する。

初級の指導案では、現場指示を中心に、①指示詞の形態を提示、②対立型を提示・練習、③融合型を提示・練習、④日本語で「ソ」が現れにくい場面を提示・練習、以上の4段階で指導を行うことを提案する。

中級の指導案では、非現場指示の中心に、①日韓の非現場指示対応関係の異同の説明、②単純照応指示用法の「コ」と「ソ」を提示・練習、③話し手・聞き手が情報共有しない「ソ」を提示・練習、④話し手・聞き手が情報を共有する「ア」を提示・練習、という4段階で指導を行うことを提案する。

上級の指導案では、中級までの指導を踏まえた上で、①中級までの復習、その後「ア」の特殊な用法に焦点化し、②非共有情報を指示する「ア」の提示・練習、③常識的世界の事物・人物を指示する「ア」の提示・練習、④言説や判断などを留保する「ア」提示・練習、の4段階で指導を行うことを提案する。

今後、同試案を韓国の教育現場に実践的に適用し、同時に、検証していくことが課題である。